美濃奇観

三浦千春著

上

ル 4
4590
1

門 ル 4
號 4590
巻 1

三浦千春著

池田崇廣畫

美濃奇觀

明治十三年一月刊行

京都大學圖書 池田

美濃奇観序

[illegible]ね。美濃乃國は。[illegible]

[illegible]を。海とおく隔たりて[illegible]

かくれ[illegible]。魚塩のたよりも[illegible]ず。

[illegible]平らかにて。田畑も廣く[illegible]事。

[illegible]紫も[illegible]つゆ。[illegible]人さへ[illegible]

[illegible]。かなたの[illegible]野[illegible]て。[illegible]乃

をいとなみけり。これなり。春は宮ぞ吉乃瀧
にまつ声とやら。秋は彼の里屋にも見
ゆるに月と。もてはやす風雅(ミヤビ)士(ヲ)もおほかれど。
そのかみ花も咲。三浦に春めしこの峠を
えらびけるおの我ことし乃秋。
濃(ミ)導(シルベ)にわたされて。ことはなれば岐阜の里よ
屋どりありけり。名におふ藤川乃ながれ

ひきぬ。旅のおもひなぐさむるものぞ。みそちたり
うつりゆく名どもひとつ〳〵とめて。時節(トキ)にはたゞ
おもひ我なれど。こゝろよりも得りて。言ひも伺
はまりつゝなり。人乃心はへしり我がけ。
乃仮宮(カリミヤ)雑をおもひしるさるゝにかゝりてあるて。
腕(イデマシ)をひろけりけり。されど右乃おほ川まうち
まへとそゞろん。やはらげ見するものゝ教り名に

すゞしき宵は。おのれもさそはれて長良川
乃ほとりにゆきしが。舟うかべてこれかれと共に。
風よき篝をまつほどに。川上の木のもとより。そのかゞ
りのちかづくを見やり。程もなく舟もちかづきて。ひとつ
の舟ども。かゞり火をさしてくだり来る。鵜匠は水乃
おもてをうちながめつゝ。鮎をとらしむ。世に
またなきながめにて。[illegible]。鵜八(ウヤツ)ひきつれなど

ひとつ手に。いくすぢの縄をかけながら。鵜乃あやつ
りをなすにも。おもひみだれしは。鵜の数ども。九つも
十もつらねながらひとつ手。その手縄をあつかふ。或いはのべて
遠くさしはなち。ひきちゞめて手もとによせ。或は
横ざまにひきよせて。その中をくゞらせ。あるは底に
沈めて。岩間に潜める鮎をひきよせしむるなど。目を
まどはすまで。あやつりなせども。その縄[illegible]

もつてふるく。げにおもしろきものなりけり。さて
錦絵をこゝろへでしらべいとをかしく図えねど。
とらず世にもてはやさるゝ名所とぞよめるかなさき
こゝろみかはしてを多度山の瀧。これかれまくもなし
はま。ゆかしへのかぶりのいでゝ新しき歌代の
号まらんあやしきことみゆれど。其のつゆでひとしくて
気うしと絵を浩りま。さもいふあればこそ。世の人の

しらずと。此国にひさしき神の遺しをあかしは
書物ども。その序文かくべきつまでもわらく字らや
よしくて。筆とりつ。すこしもたがはずやむおもむき物から。
きはがうりさらふしぎられたり。あながちまよの娘がむ
や。空言にかけて筆とおきぬ。
こはさぎ文昔樵翁。三層石の為にそえる
序文なるといふ。清書しつ揮毫ぬれどる。

いかなる根源は乃ちまさにしらずゆくりなく
病に罹りて、ここちまひぬれど。此みのや
どりの集まりもなりし。代りて筆をとれるは
吾也。
ひかる程世にしあらば見ばしてながら川。
何守宇花とおりにきてみむ。
明治十三年四月　近藤苔舟識

我が美濃乃國しもれくよりなだたる所
おほかりぬる中に、余所乃國人の口にも
あひくちへいにとどまりて岐阜の里よそへる
長良川の鵜飼と、養老山なれ養老の瀧とよそへる
たりけるをもく、養老の瀧ハしも、むかし二御代の
帝行幸ましくまさしめる、かしこまりあはれ
長良川のうかひを、いにしへよりあまりあれ
そのころむかしにきこしめしけれ、ゆたかなる世

書ことよりのちも見そへてむ世にいふ
名高くなりにたる此須波阜縣のつ
ら人三浦千春の君事繁き務のいと
ゆくしけき乃二所乃ことをとりて今の
うつしゑもおほくひきむくはしくうつしのくはし
てかきとゞめて世乃歌人のこゝろをよ寄せたる
奇なるあとゝもまじへ又其うたをさへ
かきくはへて一巻となしたりあはれ

この国人はいふもさらなり外所乃国の
人まで遍く見るを得おもはゞこの書
なかりしものを多度山乃林麓おほのほとりの
らぬ高田の里よりもみる岐阜の邊の
海しく長良川のほとりやかやゞや家
よ理くうつしひきて伊かのりこゝろ
くわしくも記したるあとをしこゝろめて
たゞうつしみるのぬるそのよろこびはりそ

りなきこともあへてを誌ぬらし

いはゝつかくるゑ

明治十一年五月　柏閒静文人

片岡をむ子書

余愛之岐阜縣十餘年凡部内之名山大川民庶之家産生業莫不省視審察焉盖吾濃以米穀紙絲為最貴民據以殷富其播殖之數贏縮之計家有簿籍官有符牒今不具論而其特以奇蹟名勝聞於世者為養老之瀑

布長良之觀漁也古者國守巡行所部每歲十有一次其二為觀風俗爲問百姓消息風土之美惡山川之形勝可以觀風俗矣產業之利害生計之貧富可以問消息矣若夫一舊蹟一名勝何損益於治體然政貴張弛民共其樂尋舊探勝亦未嘗不爲政治之一端也明治戊寅車駕臨幸本縣余奉迎之次命僚吏編録地勢之險易民俗之醇漓及物產土宜名勝舊蹟上之然事屬匆卒蒐輯未備

深以爲憾々茲己卯偶閲三浦千春所著美濃奇觀養老之瀑布長良之觀漁及稻葉故城莫不詳載焉余大喜曰是可以補前日之闕矣乃淨寫一本以進奏千春感喜欲刻以傳不朽請余一言夫觀風俗問消息吾職也聊錄其由爲之序若夫全州之形勝風土之美惡以編成縣志猶有待於他日也

明治十二年十二月

岐阜縣令從五位小崎利準識

破晴逢夏後梅雨清之
怪月痕浮能將鼓筆寫
新泥未除漸々生韻流
猶將列隊千餘艘圖浮去
自之游逸漁翁亦漁富閑

蘇笋多篭子笑迎鉤月
漁翁遥看漁火流人
唱竟高歌須臾舟去炬光
香水為福以龍江東京関
長良川観鵜為舟主堅深ト
代説詞多之尚説長歎
小莊[illegible]
[illegible]

[illegible]

美濃奇観巻上

鵜飼　長良川

美濃　三浦千春　著

美濃国長良川ハ古ハ稲葉山乃麓を流るゝ川なる
古へ稲葉川ともいへり（末の稲葉山の條下見合すへし）水源ハ同国郡上郡
より出て郡上川といひ武儀郡ニ入て藍見川といひ夫より
下を長良川と唱ふ末ハ墨俣川ともいへり此川
鮎多く名物にて諸国に冠たり鮎ハ春より秋の末
つく河瀬の石の間に住ミをなして後ハ瀬のひゝきてゆき

目にもかゝらぬ程なるかたちなれども水に浮出て海にくだり
くだる（卵の中よりはやくながれて海にくだり潮にたゞよひてかひわたりをいへとも此れ人よく云ひたるにはひよりて後海口に至るもあるとぞ又あるる鮎川下にくる也潮さかひにて子はおほへてあるをいへり）今年立春後五十日ばかりの程に至りては成
長して長一寸あまりなるものは川上へ漸くのぼり初るなれどかくて四月
の央には長三寸ばかり又夏の間次第に大いに秋の半に
至りては既に肥大なりて甚長き大小有といへども雌魚子を
孕みて腹に満たれば味殊に美なりて黄ばみて長良川
にて漁人鵜飼ひしてあゆを取これを鵜養といひて専ら
取るなれば鵜飼川は鮎の成長する時を待て初夏（陰暦四月中旬）
の頃より鮎の衰ふるころにいたる季秋（陰暦九月上旬）に終る其業ハ
月なき夜を待て船を浮べ宵暗のほとり日のくれぬる頃に
上の瀬に登りて漸く下る也其鵜飼の数長良へ七
艘小瀬へハ五艘の船ごとに人をのせ船ことに鵜匠とて中鵜使
ふ人篝工といふ人乗て船の舳先に篝火（鉄の籠松明なり）をともし鵜を
十六羽（此内十二羽を鵜匠壱人にて使ひ四羽を中鵜使のものこれを使ふなり）各其頭を縄もて繋き
縄の本をひとつに手よりて鵜匠これを手に持ち水に放ち入ば
此縄をよく縄よりかいくる時鵜匠互に聲を揚て勢をそふれハ
（世俗喃々語を鵜匠にみとふこれより起れり）鵜は鮎を逐ておのゝもとく水底に潜ぐ

ごとく所の口あらはなりしに蜘乃巣のごとく乱るゝ縄を
いとたやすく操りさばく片手に鵜乃呑たる鮎を吐せ
鮎の大なれと三四尾呑たる内幸かけて一時に之と吐しむ初夏のころ鮎小なる時分ハ七八尾を咽に持せ吐せしむ 又水に追入を篝に松を
たくはへなどしてこれらの事をもあやまたず立てゝなくなり
この船ともとらあまた並べつゝ漕下すを見れハ篝の火の乱れに流れ
至は雲に映やく甚ましさ物にたとへいふべきなし又時によりて
ハ巻狩といふ事ありなとて数多の船をひとつにまとめ川の
よどみを取囲み或ハ登り或ハ下り篝の乱れつゝたま
火花をちらし船なとしと競ひあふたけき益なり明き

水底に 謡曲鵜飼に底をもみゆる篝火に 行方なく魚をとられまじく云々 鮎ハ行方なく底をうかれ
前後左右に逃まはるを百余の鵜あまたかけ争ひて
の平影をうかれ片淵に追つめ迫つめ呑くハ浮ひ叶くハ沈
み瀬に捕へ出ならはハたとへハ戦場に軍卒とも北るを追
ひ走るを討あり縦横散乱する様に似たり見る人無に力の時の
移るをもおぼえず世にも希なるものなりといふべし甚奇絶
なる鵜飼にあらすや鵜飼ハ長良川にかぎれるがごとく見えるにハ
岐阜の稲葉山の麓あるをもって勝まさりたりと次は山の長良
川に臨めるの風景支那の赤壁の画に似てつゝたまたま夕

待つまゝに男ども小船に棹さして山際に浮びて
編提(サヽエ)をもちて一盞を傾る程よけれは船伏山のうへにたく篝
火の影の波にうつりて蔭につゝみえそこはかとなき哀れ乃
ひかりに興櫻のみきはにそゝきけるはおもしろし　文
明年中一條禅閤兼良公當國にて厚見郡江口村
にて鵜飼を見られしことあり 委しく藤川記にあり末に全文を引り 又慶長十六
年に八束照云元和元年には将軍秀忠公も岐阜に来て
鵜飼を見られし事あり其後尾張乃藩主権大納言義直卿ともに光
代々の主もたびたび遊覧し其他文人詞客乃此地に

もの世にたえなるものなりされ 美濃國古蹟考云今謂鵜養者以當國為第一故聞遠國雖諸侯秋日犯界求轅停此地逍遥者多云云
○凡鵜にて使ひて魚を捕ることを始めし橿原宮 神武 乃
御代より始まりて天皇御製に島つ鳥鵜飼か徒とよみ給ふ
事は書紀神武御巻に天皇欲省(ミソナハサント)吉野之地云云 及縁(ソヒテ)水
西行亦有作梁(ウヘテ)取魚(スナトリスル)者天皇問之對曰臣是苞苴擔(ニヘモツ)之子
此則阿太養鸕(ウカヒラカ)部始祖也とあれハ阿太 大和國宇智郡 人ハ鵜にて使
ひ又梁をかけて魚を捕しなるべし 又雄略御巻云誘率(アトラヘタシヒテ)武
彦於廬城(イホキ)河偽使鸕鷀没水捕魚云云 廬城河ハ伊勢國

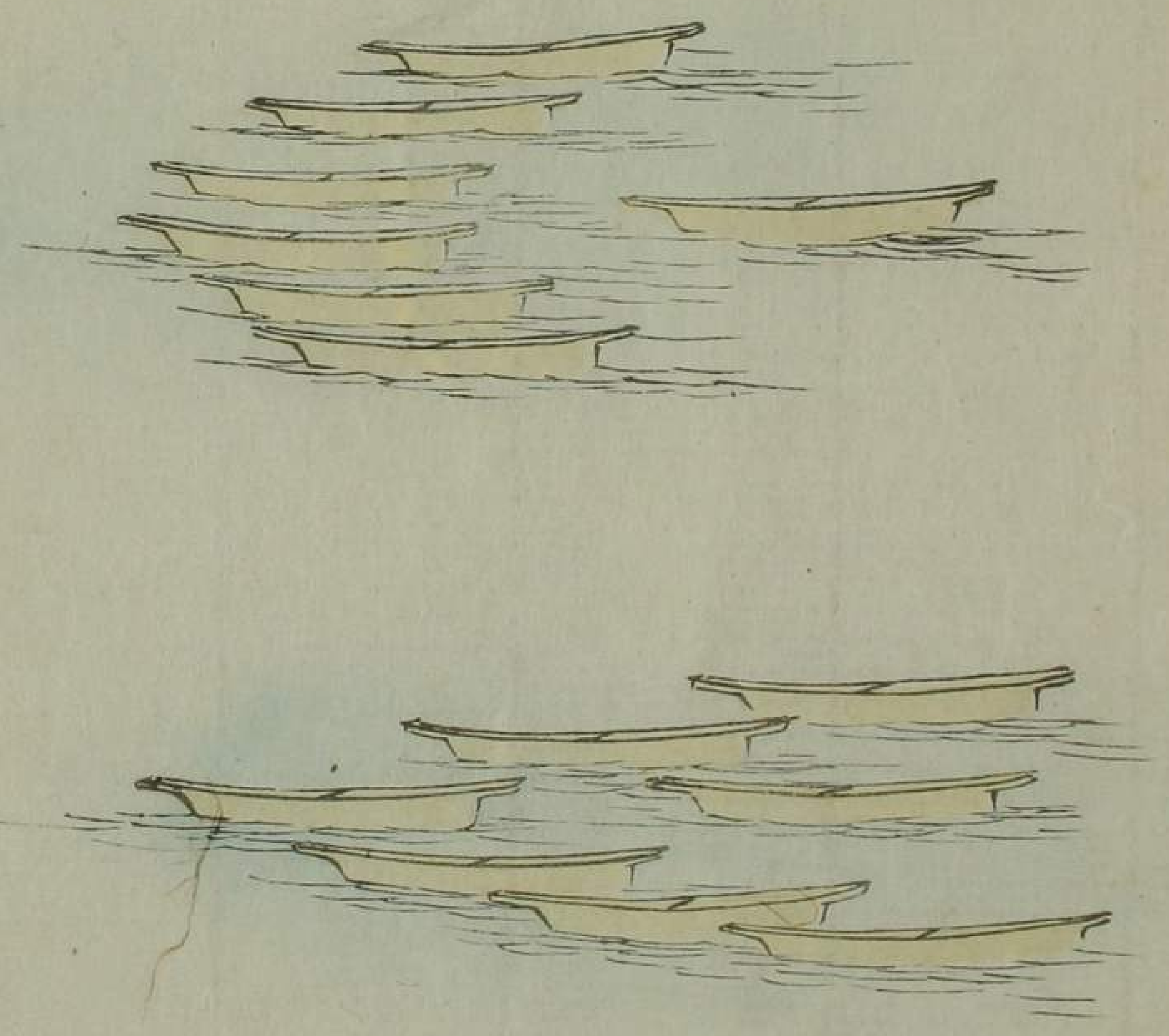
鵜養(ウカヒ)の圖

新古今

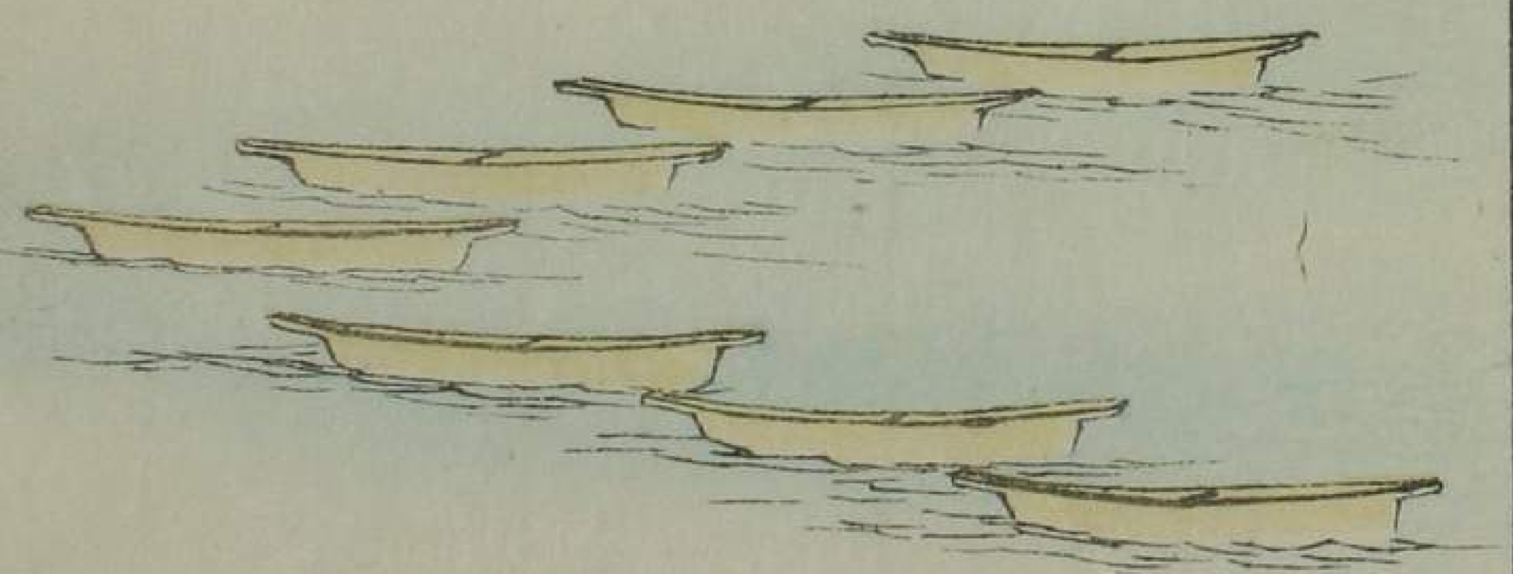
鵜かひ舟
たかせさしこす
ほとなれや

むすほほれゆく
かゝり火のかけ
寂蓮法師

鵜船漕つれて
下る時の位置を
見せたる圖



舩乃備へハいろ／＼多く
あり川の廣狭流の
緩急によりて一ならず
此圖ハそれ大體を
志るすのミ



鵜を使ふ圖
手縄ハ鵜匠の左手ニ握り持つなり
手縄さばく状
鮎呑たる鵜をもれはけし状

鮎を吐せる状
篝小松を焼そへる状

壹志郡なりまた萬葉集の中に越中國の辟田(サキタ)川賣比川越前國の叔羅(シツラ)川なとに鵜河をたてまつりて古は鵜飼の事諸國よりつとめて公に仕へ奉る鵜養をかけて職員令大膳職に雜供戸義解謂鵜飼江人網引等之類集解釋別記云鵜飼三十七戸をおきて侍中群要に諸國進鵜召鵜飼云云本朝式に鵜飼四人御厨子所別當預之とありて支那の書にも北史倭國傳曰倭國水多陸少以小環掛鸕鷀項令入水捕魚日得百餘頭以充食とみえ又皇國のみならず他にもありけるよし漁隱前集夷貊傳曰余官建安因事至北苑焙茶泛舟而歸

中途見數漁舟鸕鷀五六以縄繋其足放入水底捕魚徐引出取其魚日覩其事。又埤雅曰夔州圖經稱峡中人謂鸕鷀為烏鬼蜀人臨水居皆養此鳥縄繋其頸使之捕魚得魚則倒提出之杜甫詩云家々養烏鬼頓々食黄魚是也また本草綱目云時珍曰云々善没水取魚日集洲渚夜巣林木久則糞毒多令木枯也南方漁舟往々縻畜數十令捕其魚とあるを見れハ彼國にても鵜を使ふことありしにや。古事記傳十九ノ巻に万葉を始めて世々の歌にも鵜川を詠み又物語書なとにぞ此彼見えて中昔まで何処にも川辺おほくハ鵜飼ありて今の世までも伝はれる遺りといふべく鵜飼のみ諸國に多かりしを漸く其方も廃れてたゞ少く残れるも僅に一二ヶ所の鵜を使ふすら稀なるに、独り此美濃國長良川の鵜養のみぞ古へより今に伝へて変ることなく上件いふも更なり、あまたの船をならべて船ことに十六頭の鵜を使ふ様に絶世の壮観といふも過たることなかるべし

近年上木の博物局動物圖鸕鷀の略説に鸕鷀云々之を養ひて捕魚の用に供すること世に此漁を鵜飼と呼ふ美濃長良川を以て最も有名とし武蔵多摩川に於てもまた其業あれとも美濃の漁にはおよはずといへり

因にいふ鵜飼に名高きは芳野川大井川桂川など

にぎはひの侭にやつけるさ絵をなさしてありしにたぐひなき
と今の人奇み鵜飼とよ景色を観る所ありしてそ廃(スタ)
きたる大井桂なとはよみつけたるハことされき志かりける幕
府のうち官とよ始めて萬の事古きにかへさせ實なく徒(イタヅラ)に
舊轍(フルキアト)をのこされ難き事多かりしを今ハ名残なくあらた
まれる物られ新しきを尊ひ古きを沈(ナツ)むこともなし
是を復古の御世の志るしなれとつくれもきる奇よき
のをハ今目前の實景にしも又地なとを所々随ひ
よみ出来るはを奇抜なる古きを流(ナツ)させて　さいはひ奈良をそて　しへも見る人なり

武蔵野の露不破の関の月なとかやうにしも奇抜をのこ
かはきりつるに似たく拙劣固陋(ツタナクカタクナ)の徒いかうちり見識(コヽロ)
あらは人皆なをとへしや八武蔵野の露ハあとなくて今
しく大宮所となりて不破の山小関ハ残れと関の固(カタメ)の跡もなく
となりて関もすてゝ御世の風とんとそてまのあたりにみるもあれ
をはれ心はいまさへしにつけてもひと難きことをはなるべし
○長良川の鵜飼ハこのひと昔あやしきかし甚始(ハジメ)と詳ならず
きはめたく本州方縣郡に鵜飼といへる郷ありこれ古へ
鵜飼の徒の住し地なりとつたへ鵜養郷ハ順の和名抄に

載皆なまりはかゝる地名なれども知るべし此郷今ハ洞、御望、
小野、黒野、折立、古市場、今川、交人の八村にわかれたり松井
八澄（鵜養の郷洞村の人）云古老の説に昔糸貫川明日焼里（本巣郡中島の古名なり）
の北より二派にわかれ一ハ今のごとく一ハ東南に流れ網代川
と一つになりて此郷に入り三勝村（折立邑の支邑）にて伊自良川と合ひき
しかれは（中西郷村の古き村鑑にも此ことを誌して糸貫川の中間に有る地なるゆへに中島と云と見えり）鵜をつかひて魚を捕
るものもありしよりて乃名とおぼえてかしといふ又鵜養乃郷の舊記
を輯録したるものに美濃國新續風土記十一巻にゆへくは
延喜ノ御時江口里に鵜匠といふもの住て魚をとりて献りき

これハいはゆる贄のひ云ことと記せり是ハ上乃古老の説なれと
後乃事を傳へたるにて糸貫川後にハ此方に流るゝとなり
しかはうかひらをハその志て便よれ川に出て魚を捕し
の終に厚見郡江口の里に移り住しなるべし（以上ハ澄説ごいへり）
今按するに古ハ長良乃大川（現今の古川筋）早田村の北より近島村に
ながれて鹿毛村の前へ流れたるにしより江口鹿毛なかりき
鵜飼の徒住しにゆへ方縣郡下鹿毛村に鵜者取ありし
こと其村乃森嘉右衛門（鵜匠の子孫なるべし）といふ者大家に所蔵せる
豊太閤時代の古證文に見えたり是れに天文年中洪水

にて井乃口（岐阜の古名）乃要水樋を押ぬき水勢溢れて終に
一派となる是を井水川といふ其後慶長十三年又洪
水に長良の堤決て鷺山村乃方へ更に川筋なして新なる
通ふ所となりしより後ハ此新川を古川と称し砂石高く
埋りて平水ハ井水川へのミ通ずれバ遂にかくなりしにこそ是今の長
良本川もち所は荒毛なりしに住し鵜匠ハ此の天文に川瀬
変りて後漸く長良に居を遷したりと蔣文素よりこの地
なれバ其ほとより鵜養乃業をなしゝなるべけれど今さ
たかにハ知りがたし

○鵜養ひする家ある所を鵜匠といふ方縣郡長良村に七戸
武儀郡小瀬村に五戸合せて十二戸あり（古ハ長良に十四戸小瀬に七戸ありしが寛永中より減して今のごとく成りしとぞ）慶長乃ころより累世連綿相續して
長良川に鵜飼を使ひ年魚を取ることを業とせり鵜匠ハ鷹匠に
等しく武家の代にて専ら武人遊備の具なりしもの（永享乃ころ今川了俊が記に鵜鷹の逍遥を好ミて志給ひし庭訓往來に為鵜鷹逍遥欲企参入候之處云云とあれバ也と見るべし鵜鷹とならべいへり）
殊に此川乃鵜養ハ代に勝れたれバ徳川氏乃治世の始、此
地尾張藩の所領になりしより累世其鵜匠を扶持し米金を
與へて鵜を養ふ料とならしめ漁をなく盛大ならしむ利

日本第一の場所なりといふ凡小瀬乃鵜養ハ上ハ武儀郡
立花村下ハ長良村に限り長良乃鵜養ハ上ハ小瀬村より上
ㇾ下ハ江崎村まで都て川長ハ九里が間とたゞ夜を
なかくよりよりに持ちなく鵜を使ふなり此鵜養乃うち
和漢三才圖會に漁人令鸕鷀捕魚魚未下咽時推鸕鷀喉則自出鸕鷀常馴知之而不俟漁人手而吐魚亦妙也其鵜使人濃州岐阜邊者至巧一舉放十四雙餘國漁人不相及やといへりさてはいかにも鵜匠乃巧なるのみにあらずその鵜を亦よく馴て意のごとく使ひ得るを奇とすべし

○鵜匠（鵜養屋 こしやう）乃家にハ鳥屋を搆へ常に鵜を養ひおきて冬春の兩（今年の鮎漁終りて翌年の漁にかゝるまでの間をいふ此間一ヶ年の中凡三分の二なり）ハ鯔鮒鮠なとを喰せしめ又一ヶ月に兩三度づゝ河原へ放ち養ひおき潜水に魚を捕らしむ是を餌飼といふ一年中鵜を養ふは労実に尠からず此飼立る鵜ハ常のものハ形大ならずして北海（本草正譌に南海といへるハ誤なり北海に産せる鵜の十月ころ餌を求めて南海にうつれる時を待て捕るし）これを小産とし鳥鵜といふまたおもて始めその雛を捕へまて能く飼て漁に馴しむ其鳥雌雄ともに用ふ久しきハ十六七ヶ年もその命を保つといふ（近年ハ食餌の十分ならざるゆゑにや十ヶ年の漁役に堪ふるもの稀なりとぞ）この鵜を捕ふるには尾張の知多郡師崎の南なる篠嶋にて十一月下旬より海中乃

巖に黐(モチ)をつけおきて一羽乃鵜の瞼(マブタ)を縫てまきと囮(ヲトリ)として捕るなり
若此鳥江にて捕獲する時ハ伊豆まであつまるものなりとぞ 和名
抄ニ云鸕鷀(シマツトリ)大曰二鸕鷀一(ト)日本紀私記云志万豆止利 小曰二鸕鶿一 俗ニ云宇 貝原氏乃大和本草
に和名抄の説非なりといへるによりて本邦乃人鵜を宇と読むハ誤なりと称ハ
別乃鳥なりといへり 按ニ是れに和名抄鵜の大なるを島つ鳥といふ説ハ當らざれど私記のいふ既に誤れりと見えたり書紀神武紀に島つ鳥
とあるハ鵜乃枕詞なり其説冠辭考に詳なり

○昔ハ長良川乃鵜飼ハ鵜をもて赤染衛門乃家集に
尾張へくだりしに七月朔日ごろなりけるに鵜河といふことをして
て詠みけるに文より株瀬川といふ所にて鵜飼するを
とよめり

ゆふ闇乃鵜舟にともす篝火を水なる月乃影かとぞ見る

とあり衛門ハ大江匡衡乃妻にして匡衡正暦中尾張
権守に任じ其国にありけれバ京より下り給ふおり
詠るなるへし 株瀬川ハ美濃国青坂乃驛乃東に流れ
川なく長良川なれは水脈別(コト)なり 株瀬川昔の流ハ大野池田両郡より呂久川をたゞちに合流あるひは分流したりしかいつの頃より川瀬うつりて今ことなるハ大河なるを昔ハ赤坂と株瀬川の宿をつゞけてうまやなりしよしハ東鑑寛喜四年の條に於二株瀬川驛一被レ施二千往反浪人等一云々と見え源平盛衰記の大政大臣師長公尾張の井戸田へ下向の條に株瀬川にてとゞまりたまふとぞ見えたり
昔はあれあるをも鵜飼を使ひしなれ也し 正暦は

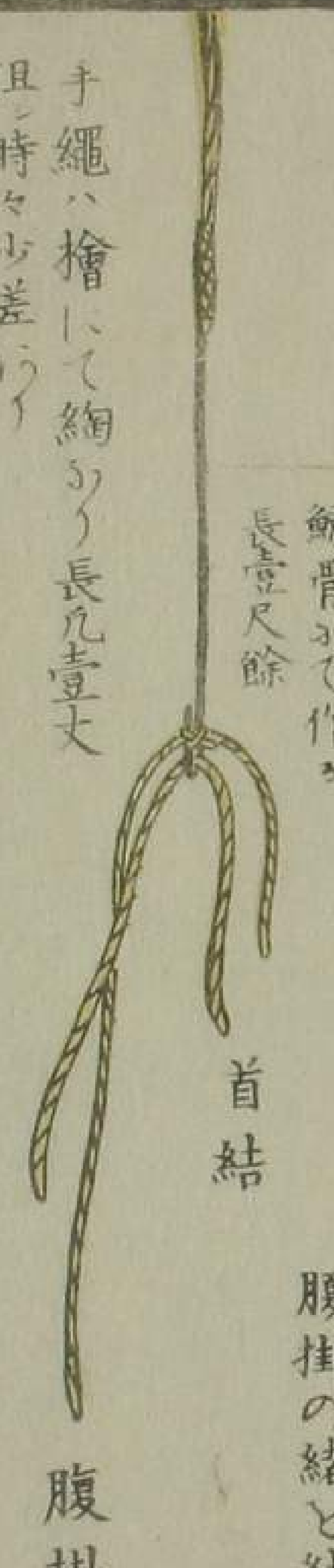
鵜匠手縄持たる圖

鵜匠ハ長三尺餘の布にて頭を包ミ前ニて結ふ又胸當とかし腰簑を穿たり

吐籠 口徑壹尺三寸 深壹尺貳寸五分

此籠ハ鵜の捕たる鮎を吐するなり

手縄の圖



手縄ハ檜にて綯なり長凡壹丈
但し時々少差あり
夏の初末々鮎の小なるハ長九尺にし中ころ
壹丈にし末ニハ壹丈壹尺ニもちふ

はもしハ末を左まぐに曲て其處へ
腹掛の緒を結びとめ首結の緒ハ
引かくしうろ
まそなり

鸕鷀の圖

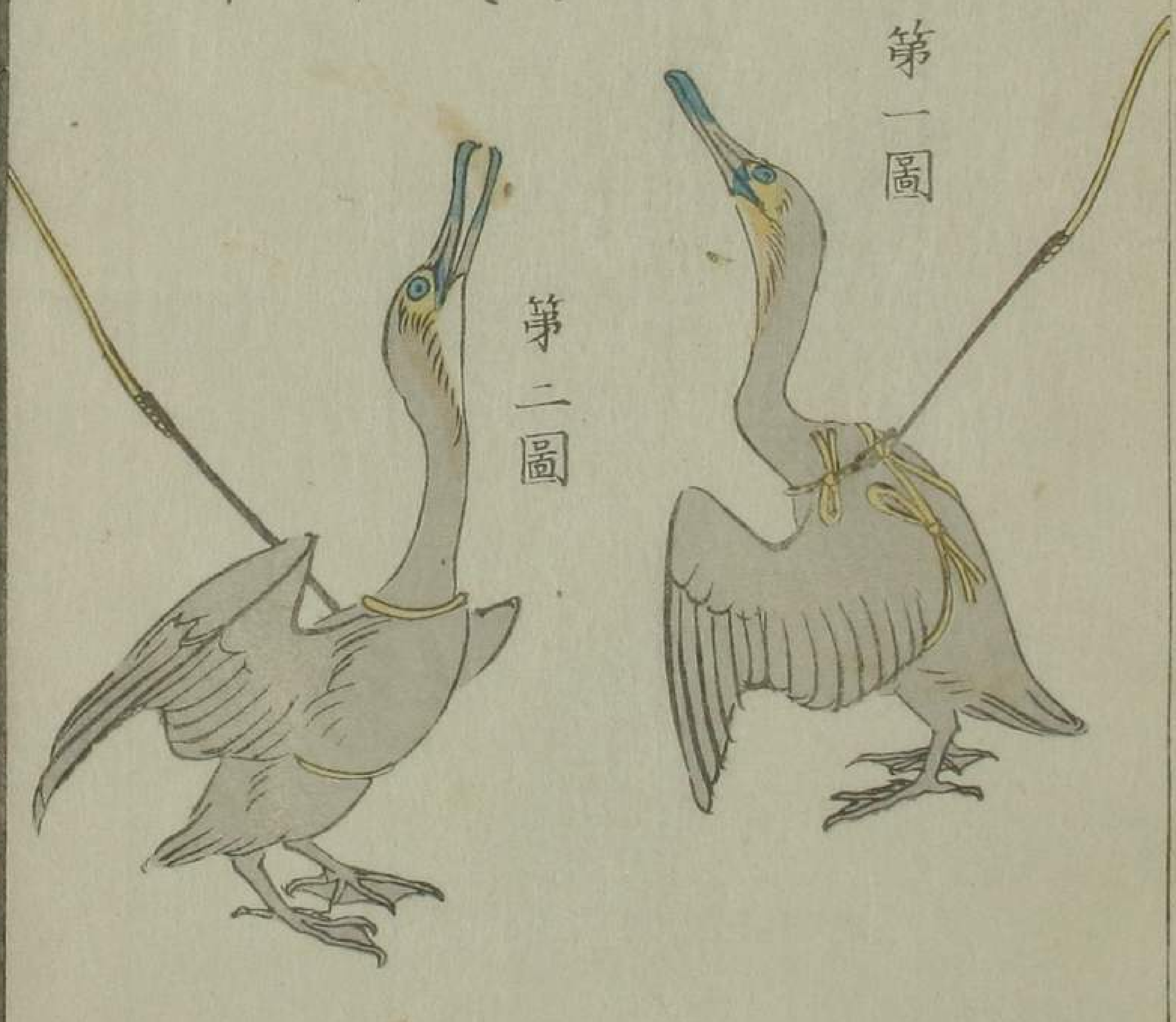
鵜ハ能ク水に潜りて巧ミ魚を捕る
捕魚漁に用ゆるハ北海ニ産せる
島鵜といふものニて常の鵜より形チ大
なり凡首尾の間背の長貳尺許
頸長くして咽喉の中八九寸ありて
全身の重目八百五六拾目其小なるを△

△六百五拾目以上のものなくてハ用を為さず
こつふ漁ニ出るときハ頸を細き麻縄にて
約ぎ呑たる鮎ハ腹部へ下らぬやうにし
おきて吐しむるなり

漁を為んとする時前
圖に見えたる手縄の末
つもとに引通したる左
絢の麻縄にて鵜の咽を
約るを首ゆひとつ此ため
加減に手心あるを又ハもとに
繫ける右絢の麻縄にて
鵜の胴と翼の下へかけて練る
を腹掛とつ両所とも脊にて
カタコブシに結ふ
其状第一圖の如し
腹のかくろ見る形状
第二圖のごとし

第一圖

第二圖



第三圖ハ鮎を啄て
嚥下む状
第四圖ハ鮎を啄て
呑ふ便なられ
時ハ嘴にて咧
なけくりへ直し
のミ入ることなり
其状をうせるなり

第三圖

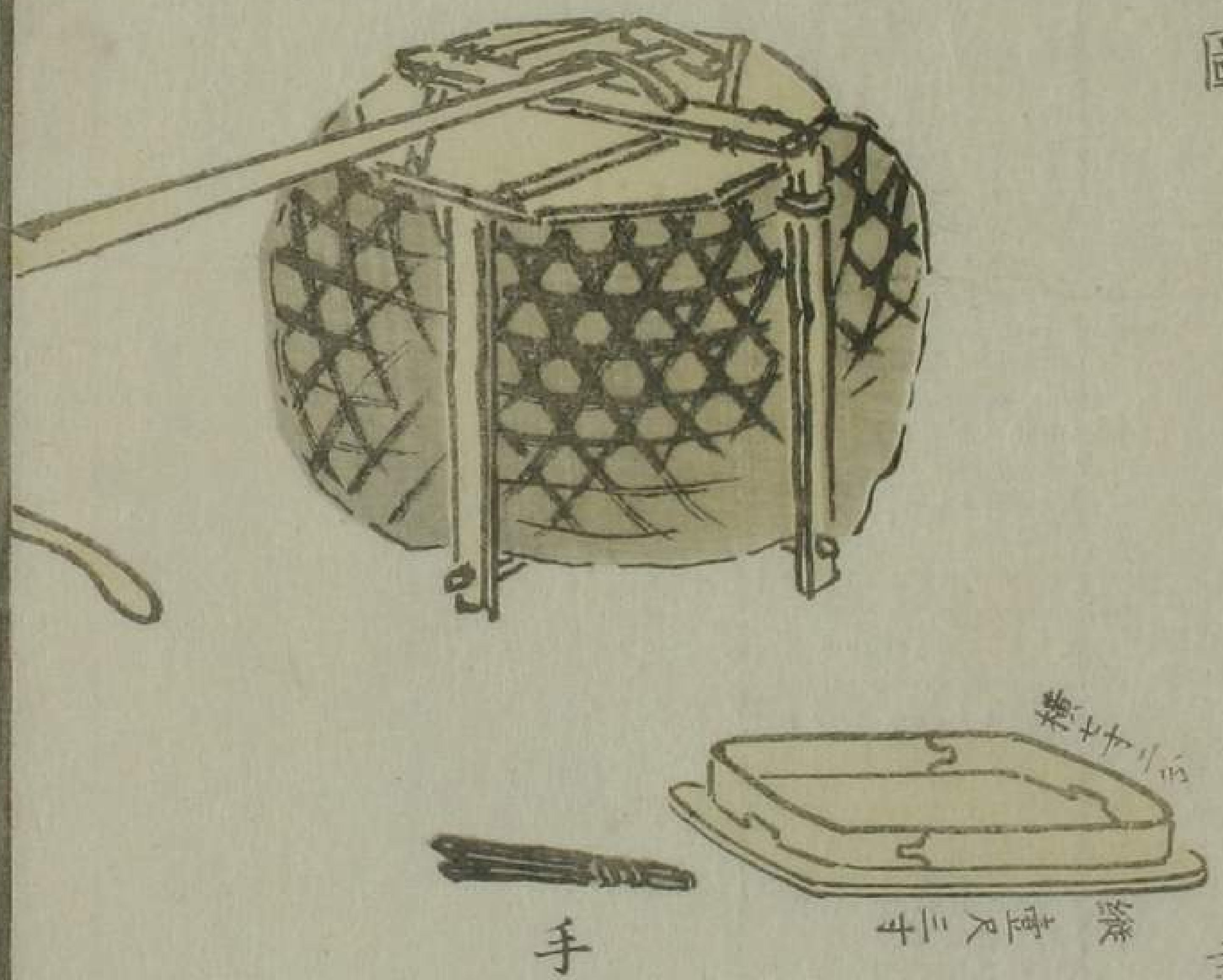
第四圖

鵜籠之圖

鵜を此籠に入てもちはこふ也

徑貳尺三寸
深壹尺五寸

謡曲鵜飼ふ鵜かごをひらきさ ごせいゝし こなるハ これなり



手松明

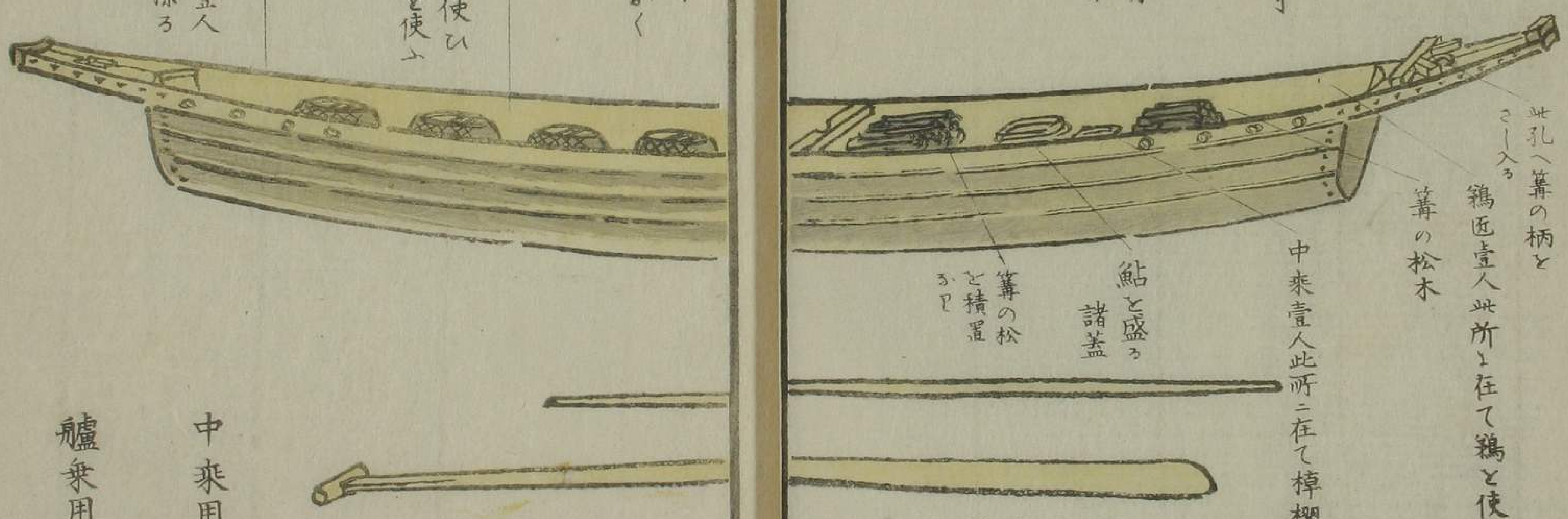
諸蓋（モロフタ）
鮎を盛る器

篝松明（カヽリタイマツ） 所謂篝也
鋳製柄ハ木製
柄長七尺八寸

薪ハ雌松（メマツ）ノ割たるなり

鵜飼舩の圖

舩身
長五間五尺五寸
中央ニテ
横三尺四寸
敷弐尺九寸六分
深壹尺六寸五分



中乗用
棹長九尺五寸
擢長六尺三寸

艫乗用
棹長壹丈三寸
擢長七尺五寸

一條院乃御宇今をさる八百八拾餘年乃むかしなれバ美
濃國乃鵜飼のふるきを證すべし是れも又平治物語に
源頼朝都落青墓下着乃條に頼朝ハ只小平乃ごとく
を通りたまひ鵜飼ハ人目を忍ぶ身なれバかゝる道をば
あらぬ谷川より忍びやかに行ける所にある鵜飼見逢なり
かの鵜飼の妻に情ありて人目を忍の御事とて御座(オハシマ)せられけれ
まことに作仏へいはく人を仏志の所へ送りしばしまし給ふべき
わかれをおしみ給ひまことにかくして青墓へ行ぬるやとこそおもへ
とのみ見えたりされバ近江より美濃の青墓に到るまで

乃間ふくいはくの川乃鵜飼なるべし
○堯孝の富士紀行九月十二日の條にもの〳〵川ハ與多
かは所乃さ海おもて桑川の両岸いとひろくて海路なりけれ
あら絶し侍る舟橋あるかにつゞく行人征馬ひまもな
しあはれを末と乃もふるゝちゆふびて庭のおもしおもしろかる
かゝるをかりけ路にうちうらいくかはりうかへたるまうにうかふるに
鵜飼舟あまたしく見ゆ侍り一年北山殿に行幸のとき御池に
鵜舟をおろされし桂人(カツラヒト)をそろへて言葉あるかりつゞまりけるを
ありしはなへと夢れかはかふに此御遊を御るをおもふのかにて

かゝりてこそ見物もし給ひぬるにぞ録

鵜は鳥なれとよくうをゝとらへて鵜ハ生ぬるまで縄にて活ひくなり

むかしよりこの業をなすものはみなこのわざをなす

さあれハ墨俣（スノマタ）川（長良川の下流）の鵜飼をよみて詠りこの紀行ハ永享四年足利義教将軍富士歴覧の道の記なり（永享四年より今明治十一年まて四百四十七年なり）

○兼良公の藤川記に云江口やつるは摂津国にいる同名なりされど遊女なとハなくて家にすれハ鵜飼のすむところを聞く

鵜かひの絵よりさきに見ハおもしろし江口は

十七日ゆふくれかた見鵜へ江口に出て鵜舟を

六艘の舩に篝をたく一艘ことに

見物す此川のよとみに晴にするにも

猟舩かゝる

川の面にその篝火の

鵜の魚を捕るを鵜飼の手縄をとりて

見給ひて言の葉文集を

うかひ人手縄のみ

まゐらする鵜乃とりたる鮎をかゞり火にあぶりて貢献せられ
とかゞり焼といひならはしけるとなむ
こはかのあへぬ夜川乃鮎のかゞり焼なるを見るにめづらしきわざなれ
されば時代ハ鏡嶋(カゞシマ)やは口とは地つゞきにて長良川さは口
村の西南を流れたりしを今は江口二町斗鵜飼をなしける
今はかくなれハ鏡嶋にしてやりて見るべし
〇鵜飼乃古事 萬葉集巻一に大御食(ケ)に仕へまつると上つ
瀬に鵜川を立、下つ瀬に小網(サデ)さしわたし、同巻十三に上つ瀬
小鵜をかづけ下つ瀬に鵜をやはらつけ上は瀬乃鮎を咋(クハ)

しめ下つ瀬に鮎を咋しめ、同巻十七に、年魚走る夏乃
盛と島は鳥鵜養がともは行く川乃清き瀬ごとに篝さし
なづさひのぼる、同巻十九に、河の瀬に年魚兒(アユコ)さし斯島つ
鳥鵜かひともなへかゞり火さしなづさひゆけハなとゝ詠せさく
この長良川の鵜飼をよそ奇しき近代乃集にはそうたるを以
きこかたなそ

老の木曽越
岐阜川乃鵜船のかゞりそこに見えなきれ 細川幽齋
あまの川星くをてらすかゞり火の影見えてよるとむかし長良川に
みの国長良川の鵜船乃篝に 本居宣長

鈴屋集
鵜かひ舟いさりはかうにはなかれ行もかへりみもはかなき火の影

長良川の鵜飼を見て　岩倉具選卿

うきましきものから此川のうかひはことに千年もわすれかたくこそ

前田の川瀬とのほる鵜に　千種有功卿

なからへ河鵜かはしらし鮎ならぬものを瀬にあまるらん伯のかけさへたのし

桂園一枝
名所鵜河　香川景樹

かゞりしくを鵜舟も行ちかふ長良川ならしへそぬこの世をおもひて

濃君か代にまあらそひ鵜舟はかれもかれも火のあかりなりて

岩代きよくてまよふ雨　大舘高門

岐阜道草
かゝりにて夜深の鵜舟のゆくゑも水底の魚も山路へもてる

長良川の鵜飼をみて　植松茂岳

家集
なからへ川すゝしくも此世に残りたえしうさはのうきものかな

本居豊穎

うしもられ文のあさしとかつてちきれもうしなくれはかひあすせは

岐阜道の記
長良川といふ此川とこれのわたりゆきては右は金華山
のちかよりへふかくつゝしみて切岸のまえ見渡しゆくにいとふかく
篝火とてもして鵜舟のあまた漕つれたる火影はなつかしは
見るからにものゝ中ゆくにゆくあとを鵜の

此村に小瀬と長良と
ひとつふなりあたり
を鵜舟の数とまで
二十一艘なりしとぞ

船々十と重ねに狩あり栄ゆる船数多かりしハ名高くも御とも
ゆく青晴乃りけれハ船乃かうちの乃月ハ同しほとなり
て人よ寄りそて語りし書付し筆にうつしとゞむる事なも
みかつぬハこの夜乃けふにうちあかりける　徳川齋莊卿
おとひきやかうかうにうれ見て去りぬ鵜舟れ数をうきとハ
この外にも吾あり　こハ天保十四年九月　尾張侯乃鵜舎
遊覧乃記なり
佐都伎の日記
鵜かひれ舟あまひハこゝよりも一里あまり川上なる小瀬也
いふ所までこぎのぼりつまれ狩まいりへとさひてまいる人もある
人酒肴なと船に持たせてあまた見物ある中にも
いと様らしく長乃かゝり闇をこえ渡りてあまた鵜舟を川
上乃かたを見るに今ハ遠く山乃かひよりかゞり火のうけたる
のみ見えたれはすゝかりくてさくとも人ハからうさ心えて
ゆうくらゐおもはる今かくおもひ詩をとるわかまちう楽けし
をへてこそきくなれ　栗田土満
く佐まくる旅乃なかれ百しらぬ美濃乃国のうみをおもす
長良乃川よわれまかじら船とうかへて小瀬川ときゝ給の
山乃そひ月まいりこと鳴けとも鵜かひさらしの篝火の影はかり

に浮ふあし引乃山のかひより落る河乃中ら浪たちぬるをそろく
うすしろく流るゝ波なかく入事ありく添ひ行くよしにかゝせ
行しるを舟よせて鵜やはかりくゝる杉のうちに鵜縄くりまく
清き瀬乃あゆとくらへ出かはりに鮎をとらしめんゆく水乃
川しらるしらぬと流乃こゆるかうゆきまゝうしかりゆまゝ
漁夫まうけ来うて光のよきうちまた乃夜ふるをゆもとかゝる世
の中は波むらにあしもれむらさき光ふなかうけ此河のあそへて
たゆみなく見なくわかく来ゆく見んすゑ

観長良川鵜養作歌並反哥

荻原廣道

菅乃根のながき此河乃上は瀬ふ舟はしのおりて下は瀬り
舟さしくだしなからかくる今此夜にくるたくの鵜をとし
かゞりさしてかつ探火ふてらして其見る者に心をつる来る
上津瀬乃鮎をとらへ見て下は瀬乃鮎をとくはしめて漕ぎもとひ
あきれをと見れは流らかゞりを紅さくるき夜の星をのみさ
瀬ふかつくてよる鮎れひかりは水底のむくろうかふよくに
いかなりうしまつうそしくをかへく鵜縄をとらへ来つきてあり
うちに待れはやふくゆつしりて見えかねくるとしかり
あさかけしらのそとれ御代ゆ大御膳に仕へまつらう

し鵜津より鵜舟のひろきは大かた此世をうしとたとへしは
なかの子乃長良の川乃河水のゆくへしらぬのみならず
大川縄小淀の人とかしいまや鵜乃所業を見つゝ楽しき
長良川にて瀬やちらむひかりをとこれをとり絶えずやあらむ

題志らず　　度會弘訓

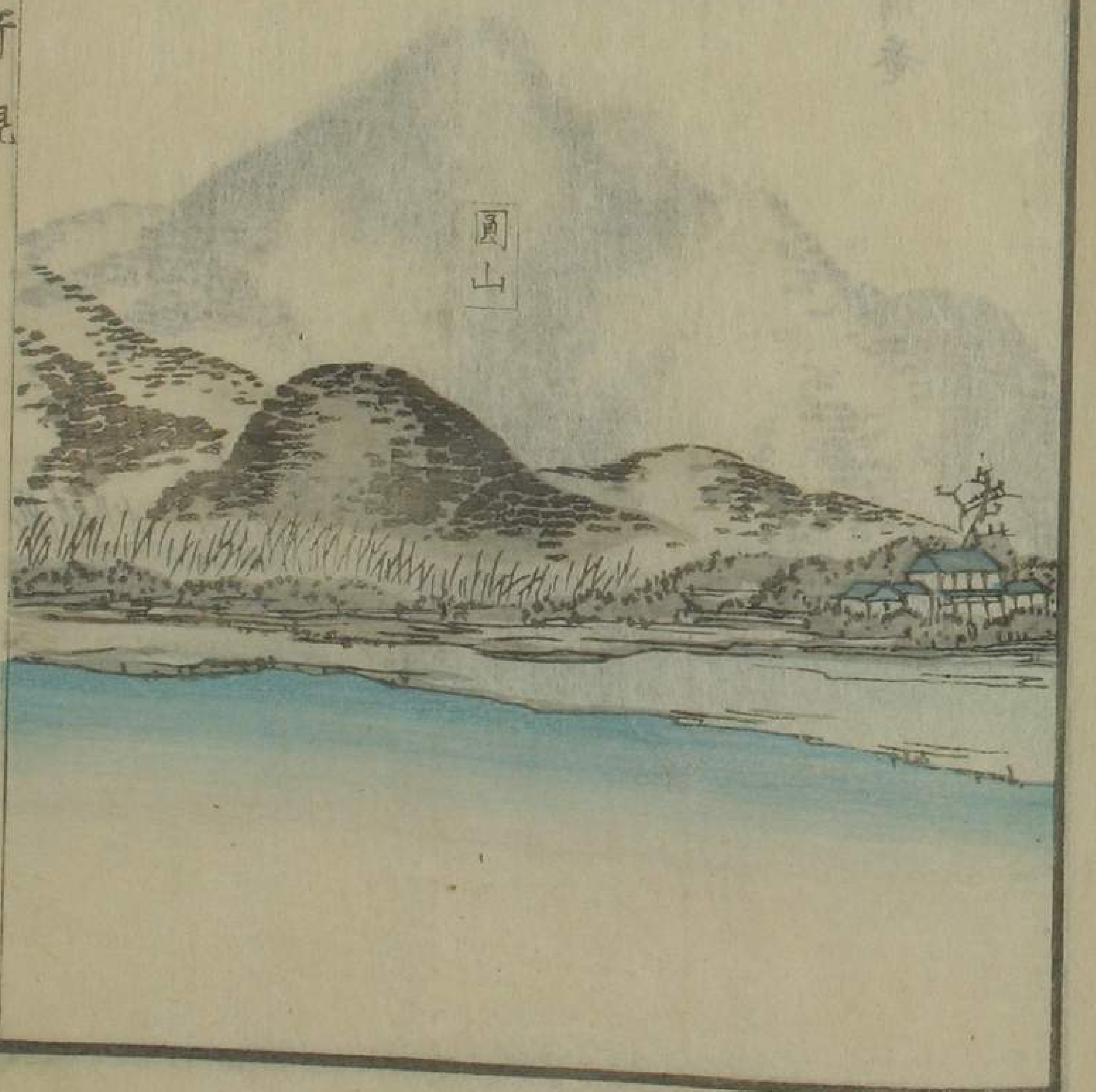
うき身をなかなかしれ此川に鵜はらおらかひのかゝるをとの鮎とられ
るけさ見舞かへみおまふ河原乃里岸に舟うち舟ちようみられ
かゝるをさしきを待つ網でおくたくの鵜縄かゝりをとりまほ早
瀬乃鮎をくはしめ又ひら願乃あめ中をくゝりしおたなべくも

縄くりくり分て船さばひけるにうつへてしまとしそう
めつらしみをれわらのたえぬこと鵜の船のすりうひきつ
志らぬ人のよのほくこゝに見るもうつりやせ
○貞享のころ芭蕉庵桃青岐阜にあそひて鵜飼の吟
ありて又十八樓の記をよくされ此の風京うつり得たる人
口に膾炙せしをもて今こゝに記す

十八樓記

美濃乃国なかれ川に臨みて水樓ありあるしを賀島氏
といふ伊奈波山後にたちて乱山西にかさなりてちかゝら

長良川眺望の圖



稲葉山

岐阜城懐古　木下順菴

日本詩選

残塁荒隍積水阿

運傾後主若悲何
雲霞偏訝降幡下
山谷猶餘折戟多
臺麓千尋空石磴
阪回百曲翳藤蘿
晩風忽起松濤湧
絶似昔年奏凱歌

も海く遠かり汶田中乃寺八枚の一山にてうつま岩り
そふ民家を作れるうみのみなとを染しつゝ布衣に
引ろくて左ぞワすし船うかふ里人の僕うひよろく漁村の
をおらく人てけうぬ引釣をたゞるとなのうけ出たしたゞ此楼を
まくなせすふ似ちを営うるゝ夏れ日をしまゝ渋ちそる早大日れ
戯をほかりうて汝よ也をほうきかり里火のうけも也ちうく
なりうて月掴乃たよしに精かひをうふとまゝに落りたし此見ぬ
なたりおしうれ瀟湘の八の景り先西湖の十れさうひも涼風一
味乃うらにおもひくそうち若此楼にのぼり暮をなすうハ

十八楼とぞいへる所にしや
此乃あたり目にみゆるものハみなすゞし　はせを
こハ貞享五年仲夏乃作なりとぞ文鱗洞乃句ハ
面白うてやがてかなしき鵜舟かな　はせを
またやたぐひながらの川乃あゆなます　仝

○鮎鮨（アユノスシ）濃陽志略云香魚ハ國俗用鮎字岐阜製鮓以充方物遂為岐阜名産
按ずるに香魚本草に鰷日本書紀万葉に細鱗魚年魚なとゝ書ア然ば和名抄をはじめて後人鮎の字を用ふるハ神功皇后三韓を討たまハむとて松浦縣にて針をまげて釣をたれ我も財の國を得むとならバ事あらハ川の魚釣をくへとうけひて竿をあけしに年魚をえたまへ此占かたの故事によりて占魚の字に从ふといへり
大和本草に沙川の鰷ハ小にして

瘦(ヤス)大石多き大河にあるハ皆やせて大にして肥(コユ)といへり
長良川ハ岐阜より上(カミ)にハ石多しされハ同し川筋にても
かしこ川の鮎最(モ)よろし　美濃明細記ニ云長良より三里川上
を小瀬川といふ此所の鮎頭小(サイ)く背大に丸ヒ故に小瀬丸と称す
大概よれ鮎七八寸重(サ)百目まりもまて大きなる稀なり長
壹尺壹寸重(サ)百八九拾匁とあり天正中美濃國主土岐家
にて後藤才助 本巣郡馬場邑の人 といふものに命して長良川の鮎に
て鮨(スシ)を製らしめ遠く公儀に贈りしこれ岐阜鮎鮨の
濫觴なりといふ其後方物として元和元年より将軍家に
献し始しか同五年この地尾張藩の封内となりしより
其藩にて岐阜に鮨所を定められ之を製して年々
恒例として幕府へ供をなしけるなり小鮎鮨ハ初夏の
ころ此若鮎にて作るといへるなり此鮎鮨を他にて比類なき
名産として世に賞せられるを許しとなせり 此鮨ハ多くて鵜の捕する鮎にて製すると常とせり
延喜式内膳式に諸國所貢年料美濃國鮨鮒隔月三缶
火干年魚一擔八籠鮨年魚四擔八壺なりとみえたれハ鮎
の鮨も古きことにして
鮎腸鹽(アユノワタシホ)辛(カラ)ハ俗に宇留加といふて風味いとよし　新撰美

濃志云支那の書に鱁鮧とあれものゝ製方同しく年
魚の腸又子を取て鹽に藏めて四方に鬻くなりとぞ
○稲葉山ハもと金華山と稱す岐阜の東にそびえてそれ西の
麓ハ至近く市街に接したり南の尾に西おもてにて石垣
高く築き鎮座せるは縣社伊奈波神社なり五十瓊磯
城入彦命を祭る境内にも櫻楓の木おほく春秋のなかめ
殊にうるはしく後を東北にゆるく一峯高く聳えたれハ
古城跡あり今俗にも金華山といひ神社のうしろなる
を稲葉山といひ慣はせしは誤にて巌峯あり

てきす原本稲葉山一名金華山あるとし　新撰美濃
志にいつるとし巓にいたる二道あり一ハ七曲口一ハ百曲口
やりし峯腸の坂路ありといへとも東北ハ長良川にのぞみ
断岸絶壁を立たるかことく嶮しくして要害双ひなく又是
ともに古木繁く生して樹凄くかのおのつから神霊の氣
に感るゝ所ありて奇しく異なる勢ある山なれハ峯に
登ると天守臺あとの遺跡ありて四方うちひらけ
郡邑の位置山川の景致眼下に見えて目も遠くまて且
寅の方にハ加賀の白山寅卯の方ハ信濃の駒ヶ嶽

嶽東濃の恵那山を望み辰のかたに尾張の二宮山小牧
山申酉のかたに伊勢の多度山西に近江の伊吹山雲間に
顕れ北は長良川のあなた方縣郡の山々にうち続く
遠く見えす南に顧れハ伊勢の海尾張の知多の浦まで遥く
を渺々として極る所を知らず誠にこの山地形すぐれて眺望
たぐひなしされハ中古織田右府ここに要害を修め西征の功甚
基を茲に肇め竟に天下の亂を静め帝室を安んじまつる
につくしけるを不幸にしてその志のまゝ終を遂ず一朝賊臣の
ために身亡ひ子孫またその業を継しも詮なくて古城も

むなしく荒て僅に残る礎さへも苔むし木葉かぶり埋み
嵐にむせぶ松の韻なりしてまことに寂寥たるものそあはれ
まことにうつりかはる世のならひなりけれ

此稲葉山の城ハ建仁中二階堂山城守藤原行政始て
これを築く星霜を経て永禄中信長尾張より當城に
移りて十二年居住あり其後信忠信孝まで二代此城
に居住し信孝天正十一年柴田勝家と同時に豊太閤に
亡ぼさるこれを岐阜の大乱といふこの時信孝
たちまちのいきほひなくなりて悔はなき山の露と消にき

こよみなれよりし天正記に見えたるも年経て後信忠の
嫡子秀信幼名三法師丸文禄元年豊太閤のはからひ
にて当城の主となりこれより岐阜中納言と称せらし
しかるに慶長五年石田の乱に与し関東勢の為に
攻落され秀信高野山に蟄居せり同七年此城を毀ちて
加納に移されたりき

稲葉山は因幡国と同名の山なり古今和歌集にも題しらず
在原行平朝臣に立わかれいなばの山の峯におふる
まつとしきかば今かへりこむとあるは古人の[illegible]

美濃の説とし或は因幡国の哥とする説もありて諸説
まちまちなれど八雲御抄藻塩抄などには美濃
の山とし（岐阜志略ニ云勅撰名所集類字等宗祇の説美濃に治定せしとぞ）夫木抄の古写本にも
伊奈波山因幡または美濃と見え井蛙抄に伊奈波山美濃
因幡両国にわたりて美濃は稲葉とも書いなはとも[illegible]
あるなりと見え頓阿法師の建保名所三百首抄にも伊奈波
山美濃とあれど中昔よりもっぱら美濃の方にとりて歌
多くし按ずるに行平朝臣のよまれし伊奈波山も今は美濃の
国のことゝ定めたれど美濃にも因幡にもしかとは[illegible]

て本説にいふところものなり

小一條殿駿河にみかりしたるにつかへまつらせ侍りけるに

いなし山といふ所にて　藤原實方朝臣

家集
むすふとはいなしの山をこゆれはあはれなりけりいつもたのもしくらむ

此哥を新撰美濃志にむすふの山をやほれいハ美濃の地名ともあはたる所歟いにしへ美濃國安八郡結村にむすふの神社ありて昔より人の知れる所なり

美濃のくにへまかりけるにある女のもとにまかりてつかは

しけるにたのむといへる物かたりしけれハ　津守國基

家集
志らしらなかりつらん見ぬ不破の関つなてゝ山のいはねにいるとや

美濃の國へゆくとてよみてつかはしける　堯孝法師

家集
たもの美ましハ都の山のかひある事て今かへるさちかきる名所

二條良基公の小島のくちすさみに内裏小島の行宮とふの庭も侍

おもふ田面に侍きていなさ山を遠ういはれ見るらむ

都のたの美をまくハまいりしをなりしを行りて

しで一本

松をひらやおもひをしぬかりはらふ稲葉の月を庭よりみて

見給へしハ同

一條兼良公の藤川の記に江口より都の夜く二里はかり

里川にそひにゆふからいきを山の麓をそくれ返ちる

は山ハ奥州より今の化生をきし伊宗波社の縁起に

ゆりとかや」とつゝけらるく　二首

こゝにおつるまではさしきやいるは山ちかみおほく御代の人へと
乃みへだはかまや松田にいそぎ松枝しつ水乃ほとれ秋乃哥
藤原實隆公乃濃路紀行に九月廿二日雨乃ふりけるに
乃ぼりつゝ此のほとり見えけるが家居ある城郭の
見えけるにつけて稲葉山といふときゝしをいふらんやらく
かくれ侍るにまことにまつれるかたつぶらなる山のかたちの岡のごとく
仁和寺僧正尊海乃吾妻の道記にハ山の上にや并
のふといへる所に一日逗留し御望八幡ひし人乃世より
なるけるのしろといひ傳へしともあらましの絵八あまりて

さる所にしもすこしくれたるしるかたに稲葉かつとありて
世乃中ゆる人いふ紫此稲葉山にむかへる松やまの郷乃遠く
去は天文二十年の記なるに甚いう井此口やいる所に岐阜
乃内東北へよれる地なり

觀岐阜城跡懷古作歌 并反歌

萩原廣道

よ五百機織田乃松ほとは八刈蒔はみまつりし世此木此盛るい
まして清きを行きつの道のまろかる伝こゝろしくなりてしまふきし
百ちふ松美濃乃國の椿ちいなきの山に天そゝりたつ城とつ
くも岡邪と遠く見さまく独らしゝて事らなくかくぞる

はら小京へのぼり天皇をうばひまゐらせて天下をうばはんたくみ
ひしかば見れば山のかたち長良川おもひやり水ははるかに下り
かなたに月見山とかの志きれ楷をわたりかゝりくるぬきさやし
て岩かどの今しき道を切通しそこは角き谷がけの水をくゝし
ゆく水をまもらせて堀をほりて谷をかけて峯に城つくりし
てそこらの高殿をたてならべたる矢倉をかまへちよ坊にて
万代までもと心をくだきしかども終に業すゝめたる事も築き上げ
しかど空蝉の世の中は常ならぬものやいの間は瀬となりぬる山
の木をうらはかりしも岩垣に夏草しげり松のえだ繁りしを

まはりのけしきは清しくかなしき泉の屋根はあれやぶれにけり
ちかくこの方をみれば都のかたはいとしるくきよらに静かにて朝廷へふ
まつろふもの門坊の二人とたのみ大臣のことはりにかなひしを
たのみし城のあとし

あれは見ゆれば尊き稲葉山峯の大城のあとゝなりぬる
なからの河の水のながれたえぬも見るはうきを今の世あるやうにや

○稲葉川昔は長良川と稲葉川とを見ればこれを此所に稲葉山の麓と
なりぬるこそ　今昔物語にいふ美濃の国にある所門
さて大河あり雨ふれば水のながれすさまじくなりぬる其

川辺にすむ人ハ家の天井を作らす板敷のみなりとか
きて水出れハ其上にのほりて汲なとも炊くなりとそ
見え又伊奈波神社縁起に載たる明神の難を法師かし
め給ひし哥 此縁起延文四年九月正四位下卜部宿禰兼前の奥書あり
伊奈波川底ふかくして波まこ石積しをさらめ猶ハめけやさと

○船伏山鏡岩あやしき所なれハ川を見れは岩あらく静閑
によみ合せ玉ふ 岐阜近辺にある鏡岩の事すへて猶明らかならす まつ尾総橋ハ長良
村ふつゝきなる尾総村の南のかたに長良川に架りたるを
より今ハなくなりて渡しをかけて岐阜より長良へ舟橋をかけて

長良川と虹のことくに横たはる立わたる事なくしく人の手を
けのこしのかけとうわたをわたるへし

夫木抄
かりそめに思ひしかりねも旅なれはおふさの橋を恋やわたらむ
衣笠内大臣

藤川記
たゝ名のミきゝわたりしおふさ橋それかありきのをわたるかたもしらぬまゝやと
一條兼良公

美濃奇觀卷上　終